

3. フィリピンへの協力

警察科学捜査専門家派遣と指紋自動識別システム (AFIS) 運用強化プロジェクト

フィリピン国家警察に科学捜査の種をまいて芽を育てるため、現在、警察科学捜査（初動捜査）専門家と警察科学捜査（鑑識）専門家の2人が派遣されています（いずれも長期専門家）。専門家は、指紋自動識別システム (AFIS) や指紋採取用の資機材の導入を図りながら、セミナー等を通じ、犯罪発生時の初動捜査や指紋採取を中心とした鑑識活動を実践指導することで、警察官一人一人の実務能力を高めるとともに、科学捜査の大切さを理解してもらう努力をしています。

その歴史は古く、1980年代初頭から一時中断を挟み20年以上にわたって続いています。その間、国家警察犯罪研究所 (Crime Laboratory) へ長期及び短期の鑑識専門家を数多く派遣し、主に指紋採取技術の向上を目指して支援をしてきました。また、捜査と鑑識は車の両輪に例えられるがごとく表裏一体のものであるとの認識から、1996年からは国家警察刑事局 (Criminal Investigation & Detection Group) へも初動捜査担当の長期専門家の派遣を開始し、現在に至っています。捜査、鑑識部門のそれぞれに専門家が置かれるようになった1996年以降は、両者がタイアップし、それまでマニラ首都圏を中心に行っていた技術移転を、全国規模で展開しています。

また、平成16年7月には、日本からの無償資金協力により、国家警察犯罪研究所に指紋自動識別装置 (AFIS) が導入されました。導入されたAFISの運用を軌道に乗せるため、平成18年夏からは、両専門家の活動と密接な関係を持ちながら、3年計画のAFIS運用強化プロジェクトが開始され、短期専門家が派遣されています。

(注) 指紋自動識別システム (AFIS : Automated Fingerprint Identification System) とは、コンピューターによるパターン認識技術を応用した捜査支援システムで、現場に遺留された指紋から被疑者を特定するための照合や、検挙した被疑者の指紋から身元や余罪を確認するための照合を行うことができます。

専門家の活動状況等

◆ セミナーの開催

概ね月に1、2回の割合で、フィリピン各地でセミナーを開催して初動捜査・鑑識技術の普及に努めています。また、フィリピンの警察大学校では、薬物取締専門家と合同でセミナーを開催しています。



植野改司専門家による警察大学校での合同セミナーの状況

◆ 事件現場での指導

事件の現場に赴き、現場での実践指導も行っています。

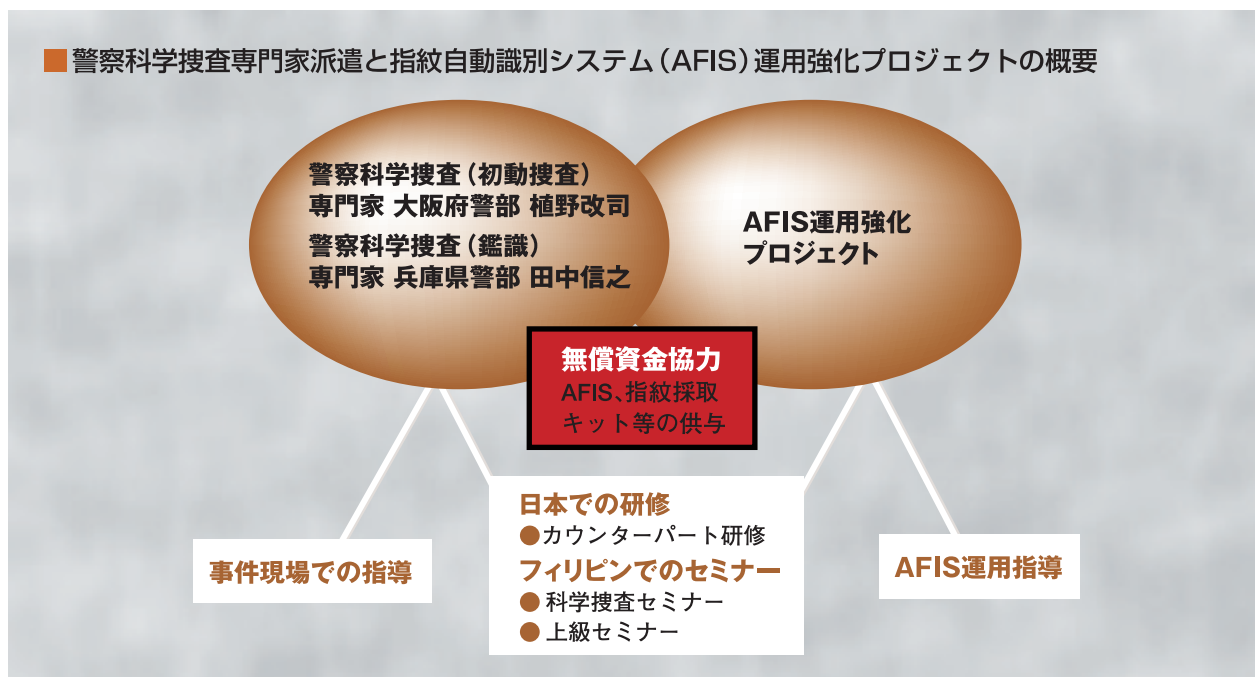


◆ AFIS運用の指導

AFISを用いた指紋の入力・照合の技術指導を行っています。



■ 警察科学捜査専門家派遣と指紋自動識別システム (AFIS) 運用強化プロジェクトの概要



薬物法執行能力向上プロジェクト

薬物犯罪対策については、これまでも短期専門家を派遣し、セミナー等を通じ、支援を行ってきました。平成17年1月からは、薬物法執行能力向上プロジェクトが開始され、薬物取締りの長期専門家が、2002年に国家警察から分離されたフィリピン薬物取締庁に派遣されました。独自の薬物セミナーに加え、警察科学捜査分野の長期専門家とも合同でセミナーを開催する等の活動を行い、2007年1月にその活動を終了しました。



柳沢裕司専門家によるセミナーの状況

コラム2：専門家の声

警察科学捜査 (初動捜査) 専門家 大阪府警警部 植野 改司
 私は、初動捜査の専門家として平成17年9月に着任し、フィリピン国家警察犯罪捜査隊 (CIDG) に所属しております。活動内容としては、フィリピン国内各管区警察本部及び首都圏所在の各方面本部において第一線警察職員を対象とした科学捜査セミナーを開催し、鑑識活動及び初動捜査活動に関する講義と実技指導等を行い、警察官一人一人の実務能力を高めるとともに、科学捜査の大切さに対する意識付けを図っています。このセミナーには年間約1,000名が参加しています。また、重要犯罪や日本人が関与した事件等の犯罪現場における現場鑑識活動及び初動捜査活動要領等についても実践指導を行っています。

フィリピンの捜査活動は、証言を確保することに偏り、物証を軽視する傾向にあるため、誤認逮捕や無罪判決等が後を絶ちません。こうした現場を考えると、我々の支援活動の意義は今後益々高まっていくものと確信しています。

薬物法執行能力向上プロジェクト専門家 警視庁警部補 柳沢 裕司
 とかく日本人は、自分の、いや日本のスタンダードをどこまでも引っ張って行きがちですが、外国で勤務する際に、日本人としてのイニシアチブを持ち続けることは重要ですが、相手国の文化や習慣に対する理解も必要だと思います。特に、一部の日本人は、派遣先の人々をルックダウンする傾向がありますが、それでは国際貢献の仕事は絶対に出来ません。常に同じ目線で、プロジェクトの目標に進んで行かなければ、何の成果も得られないでしょう。例えば、約束の時間が一番の例でしょう。彼らは、約束の時間に遅れて来ても大して気にする様子もなく、こちらが聞くと、「ああ、渋滞で遅れた。仕方がなかった。」というだけで、別に誤る様子もなく、着任当初は随分血圧が上がったものでした。これはほんの一例ですが、日々、文化の違いを超える戦い(笑)に汗しながら、しかし、フィリピン人の明るさと優しさに助けられながら、毎日がんばっています。